

富山の最新ニュース

webun

北日本新聞



滑川市早月加積地区／清流の里めぐり 2014年8月15日

4. ほのぼの館



■ 地域で子ども育てる

名前通りの「ほのぼの」とした光景に、思わずこちらの表情も緩む。

明るく広い部屋で子どもたちが無邪気に遊んでいる。友達とじゃれ合いながらブロックを組み立てる男の子、テーブルに顔をくっつけるようにして一生懸命に絵を描いている女の子…。そばでは女性たちが見守っている。

7月中旬、滑川市四ツ屋の放課後児童クラブ施設「ほのぼの館」。3年前にできた木造平屋建てで、東部小学校の敷地にある。早月加積、浜加積両地区の1～3年生約70人が利用

し、放課後の午後3時から同6時まで過ごす。

「働く親が安心して子どもを預けられる場所。それを第一に考えています」

子どもたちと遊んでいた指導員、辻尾立子（りゅうこ）さん（60）＝上小泉＝が話す。

もともとは、東部小の多目的ホールを利用していた。だが登録児童数が国のガイドラインを大きく超え、十分な広さを確保できなくなった。

このため2009年、早月加積地区公民館と浜加積地区福祉センターに場所を移動した。ところが、ともに学校から約1・3キロも離れていた。防犯面や利便性の面から新施設を望む声が上がリ、11年、市内で唯一の放課後児童クラブ専門の施設ができた。

指導員は15人。辻尾さんのような元教員もいれば、子育てを終えた主婦もいる。それぞれの経験を生かし、勉強を教え、一緒に遊ぶ。児童たちも上下関係の中でさまざまなことを学ぶが、集団生活のルールの大切さを伝えるため、あえてしかることもある。

何よりの喜びは、子どもたちの成長を感じられること。

「最初は泣いてばかりだった子が、自分の意見をしっかり言えるようになる。『ずっとここにいてほしい』と思うこともありますよ」

指導員の山口志賀子さん（47）＝追分＝が笑顔で言う。

辻尾さんが力を込める。

「学校、親だけじゃなく、地域も一緒になって子どもを育てる。それが私たちの役目かなと思うんです」

「ほのぼの館」には、かつての“教え子”たちがいまでも指導員を慕って遊びに来る。

■遠望近信 黒川純一さん（65）茨城県土浦市、JMAS顧問

18歳で富山を離れ、大学を出て陸上自衛隊に入隊しました。約30年間勤務した後、認定NPO法人のJMAS（日本地雷処理を支援する会）でカンボジアやラオスの地雷、不発弾処理に携わりました。

小中学生のころ、夏休みはほとんど毎日、早月川やその支流で真っ黒に日焼けするまで遊んでいました。丈夫な体をつくってくれた原点です。

全国各地での生活も経て思うのは、富山県人は一面では保守的だけど好奇心がとても強い、ということです。私もやっぱり富山県人なんだな、と感じます。（中村出身）